

二〇二四年一月二六日

黒ぼこを持ち上げてをる霜柱
凍月の雲に滲みし月光環
さざ波を枕のごとく浮寝鳥
海風に研がれし丘の梅真白

かえる
あられ
康子
千鶴

二〇二四年一月二五日

朝の陽に微笑むやうに梅ふふむ
門ごとに柵を挿す古都の路地
庭存間こんな所に藪柑子
悴みし手に息吹いて支払す
旅の本折り目付けつつ春を待つ
老幹を撫でて雪折れ悼みけり

かえる
智恵子
うつぎ
満天
康子
かえる

二〇二四年一月二四日

雪催ひ紅茶に垂らすブランデー
葉牡丹の同心円に色深む
極寒や独り居の身となればなほ

なつき
むべ
たか子

二〇二四年一月二三日

初春や白面の富士泰然と
寒風にテニスボールの歪みとぶ
野ざらしの古壺に宿る余寒かな
日さす窓へと首捻じる室の花
底冷えのテニスコートにたたら踏む
雨晴れてきたとおしやべり寒雀

千鶴
ぼんこ
澄子
かえる
ぼんこ
かえる

二〇二四年一月二二日

天守閣より鳥瞰す梅の園
日の射して四温の鯉の動きだす
げんげ田に片足入れて測量す
青竹の壺に一輪寒椿
すつと席立ちてどうぞと春コート
地べたより屋根へと移る猫の夫
枯蓮の中に真つ直ぐ鷺の脛
つけ添ふる仏花に庭の猫柳
裸木にひつかかりたる昼の月

はく子
満天
みきお
澄子
千鶴
澄子
素秀
うつき
あひる

二〇二四年一月二二日

庭木影現れては失せる白障子
白息の気合発止と小剣士
山茶花の屑が埋めしなぞへかな

うつき
素秀
えいじ

二〇二四年一月二〇日

納骨の帰るさの道時雨やむ
医師に問へば答へ曖昧うそ寒し
検査着の折り目正しき余寒かな
大根引手塩かけたる重みかな

むべ
なつき
なつき
豊実

毎日句会みゆる選・二〇二四年一月二八日